

## I 音楽科 研究テーマ

「音楽のもと」を意識し、思いをもって音楽と豊かに関わる子どもを育む学び

## II 研究の重点

音楽的な「見方・考え方」を働かせながら、よりよい音楽表現を目指す子どもを支えるための手立て

## III 2年次の成果と課題

### 1 成果

#### (1) ゲストティーチャーの演奏から得る新たな「音楽表現」

2年次の実践では、よりよい表現を目指す子どもを支えるための手立ての一つとして中学生によるゲストティーチャーの活用を取り入れた。中学生の歌声は、4人という少人数ではあるが、小学生に比べ声の響きや音の重なり、強弱においても質が高く、それに伴って感じられる曲想も豊かであった。子どもたちの新たな「学びのものさし」は、中学生の歌声によって更新された。中学生の歌声を子どもたちが体感したことにより、耳や体で感じ取った音を目指そうと試行錯誤する姿が見られた。それは、「今日は、声の一つになって響き合った感じがしました。高音は特に響きやすいので歌い方や歌詞に注目しました。歌い方によって曲の世界観が変わることにも気が付きました。目標はあの中学生の響き方になりたいです。」という子どもの振り返りにも顕著に表れている。歌声からも、自信をもって取り組んだという達成感や満足感、そして、もう一度歌いたいという次への期待感へつながっていった。

このように、ゲストティーチャーによる演奏が表現力の向上に大きくつながることが明らかになった。手を伸ばせば届きそうな中学生の歌声によって、子どもたちは音楽活動の目指したい具体的な目標を描くことができ、「学びのものさし」を自発的に見付け出し、更新することができたのである。中学生によるゲストティーチャーの活用は、よりよい表現を目指す子どもたちにとって明確な道しるべとなり、有効であると考えられる。

#### (2) こだわりのある「楽譜を読む・試す・聴き合う」活動

2年次でもよりよい音楽表現を目指し、「音楽のもと」を根拠とした表現の仕方を伝え合うため、言語活動の場を意識的に設けた。「楽譜を読む」活動を丁寧に扱い、楽曲のイメージからどのように表現したらよいか、さらにはどう表現したいのかというところまで迫り、試行錯誤をしてきた。強弱について「学びのものさし」を働かせる際に、声量だけでは解決できない歌い方の工夫を自分たちなりに試す姿も見られた。「やわらかく歌いたい」という思いを実現するために、「弱く歌う→丁寧に大切に言葉を歌う→始まりのブレスを深くする」という過程で歌い進めることを取り入れた。声量の大小だけではなく、声質の柔らかさを息づかいに着目しながら考えることで、音として聞こえる歌声のみならず、息づかいも工夫の一つとして表現したいという欲求が高まっていった。曲に対しての思いをわずかでも膨らませることで、音楽記号として楽譜の中に示されていないことにも気が付き、よりよい表現へとつながっていく。また、「演奏する役」と「聴き役」として歌ったり聴き合ったりする活動では、自己と他者の演奏比較を意識しながら根拠をもって感想を発言できるように、「聴き役」の聴く視点を明確にしたことで、表現のよさを認め合う姿も見られた。

これらの手立てが連動し、子どもたち一人一人が思いをもち、みんなで作り上げるよりよい表現を追究できていたのではないかと考える。

### 2 課題 思いや意図に合った表現をするための技能

目の前のよいモデルから学ぶことは多く、自分もこうありたいという向上心を高めることはできたが、さらに豊かな表現に向けて子どもたちの表現の引き出しが増えていくような学習過程を工夫していくことが課題である。子どもたちが考える表現の工夫やアイデアをいかにして技術的に表現できるようにしていくのか。機械的な反復練習で終わることなく、子ども自身がよりよい表現のために試行錯誤し、自ら音楽表現を楽しむ姿を引き出すための授業構想を模索したい。